

さくら児童クラブ指導員研修会 II



平成26年9月5日（金）
さくら小学校 児童クラブ室

参加者：児童クラブ関係者

講演 集団活動と子どもの関達、最近の特徴

愛媛大学教育学部教授 白松 賢

2006年まで、非行系の子どもと関わってきた。徘徊する子どもに声掛け等をしてきたが、子どもを取り巻く大人の働きかけが上手くないことも多い。

大人が集団のマネジメントをする。ビジョンの共有化を図り、「子どもの願い」と保護者の想いをしっかり話し合い、合意する必要がある。その時代に生きていく子どもの興味、関心事を理解（グーグルなど時代に合ったキャッチコピーなどともうまい）し、労力をかけて向き合ってほしい。

1990年から教育のロストゼネレーションとなった。今まで受けていた教育では、教育できなくなった。また、厚生労働省管轄の児童クラブ、文部科学省管轄の学校というすみわけがあって、中々情報も共有することができなかった。社会の急激な変化とともに、「いじめ」や「学力」が低下し、その原因の責任を転嫁してきた。

「してはいけない」「できない」指導はよくない。悪いことだからこそやってみたいということもある。いけないことが起きた場合、子どもと距離を置きながら、見守ることが出来るかどうか。近くで見ている視線を遠くからでも見る事が出来るかどうか。「このようなときにはこうするのではないか」と予測する必要がある。ただし、集団となると何十人もの子どもと関わらなくてはならない。子どもは、3歩歩くと忘れるので、その度に何度も注意する。約束は時間が経つと忘れるもの、わすれることを前提に何度でも言う。

女子の非行は帰ってこないが、小さいころからしっかり指導している子は帰ってくる。問題のある保護者は、「どのようにしたらいいか」とは思わない、すぐに答えを欲しがらる。今はできないが、そのうちできるようになることがわからない。

アニメーションのサザエさんの父親、波平は教育力があつたかどうか、みんなが同じように怒られる、シンプルな地域共同体があつた。ちびまるこちゃんの場合は、

怒られるけれど、反省しなかった。クレヨンしんちゃんはきかない。現代の保護者はあれもこれもしないと不安。生まれてくる前から始めている。昔は、大人が忙しく、躰などしていないがそれなりに育っていた。今の保護者は子どもに関わりすぎて、母子分離ができない。メディアが子どもをだめにしているところもある。雰囲気コミュニケーションをとる子どもが多く、できない子どもは入っていけない。メールで、ほ・う・れ・ん・そ・うしている。子どもも保護者もグループをつくり、攻撃し合う関係になると最悪である。全員が友だちという感覚がなくなってしまった。

今ある文化をどう消滅させるか。不便なことが新鮮である。経験させ、学習させる必要がある。叱られる経験のない子、小学校へ行ってもオムツをしている子、学校へ行かない子ども、児童クラブの支援員と学校の教員が情報を共有し、スパイラルに子どもを支援していく。

メタ認知させる、できているところとできていないところ、何が分かって何が分からないか、できそうなところを褒めてやる。できるかできないかわからないが、前向きに進んでいる子を褒める。日本人は完璧にできていなければ褒めないから、自尊心が高くなる。世界でたった一人の子ども、その子の最大の褒め方をしてほしい。

子どもの情報については、教員と支援員の共感的理解が必要である。発達段階に応じて適切な言葉かけをし、そのときは通過できないことでも、将来的には役に立つことがある。

Q:褒めることは大人の価値観を押し付けることにならないか。

A:学校の社会化、子どもをコントロールするのに、あめと鞭のような褒め方は間違い。社会で通用する人格をつくる。「これは大切にしてほしい」と思うようなこと、先生の言うことを聞くがいい子ではない子をつくるのではなく、社会にとって、物事の善悪がわかる子どもであってほしい。

Q:リトミックは効果があるかどうか。

A:就学前までは、どの年齢でも楽しめる、情緒を発達させることができる、目に見えないものとして、その効果を楽しむことができる。バラエティにとんだリトミックのマネージメントをすればいい。

Q:お子さんを児童クラブに預けるとしたら。

A:子どもが笑顔で帰って来てくれるといい。今日こんなことがあったと話してくれるようなところ、学校と違って自由な空間、学校と情報の共有を図って、子どもの発達が学校と違うところで見えると嬉しい。感謝の気持ちとあたたかい気持ちが育つようなところであってほしい。